

博士論文（要約）

戦術、「翻訳」、出会い
—戦術的ピリオダイゼーション、あるいは社会的組織化の過程としてのト
レーニングと試合をめぐるマイクロ人類学

相 原 健 志

目次

はじめに ピッチと他者 7

第 I 部 戦術的ピリオダイゼーションと／の人類学

第 1 章 「ミクロ人類学」と他なる人類学

- 1 戦術的ピリオダイゼーションとは何か 18
 - 1.1 歴史的経緯と背景事情 18
 - 1.2 理論的特徴・概要 23
 - 1.2.1 サッカーのトレーニング方法論としての位置 23
 - 1.2.2 理論的概要 24
- 2 人類学-になること: 「翻訳」と出会い 28
 - 2.1 他者の「翻訳」としての人類学 28
 - 2.2 根源としての出会い 30
- 3 他なる人類学との出会い 31
 - 3.1 実践と学習 32
 - 3.2 情動と社会性 35
- 4 事例の資格 37
- 5 本論の構成 38
- 6 いくつかの補足 41
 - 6.1 サッカーに関する用語の使用法について 41
 - 6.2 測定と評価の外在性 43

第 2 章 戦術と自然

- 1 戦術概念の内包 45
- 2 複雑なシステム 47
- 3 プレースタイルと場の変異性 54
 - 3.1 状況に埋め込まれた実践 54
 - 3.2 プレースタイルの変異可能性と非現前性 54
 - 3.2.1 プレースタイルの外延の変異性: 実践の機能的配分の開放性 55
 - 3.2.2 プレースタイルの非現前性: 模範的实践者との関係から 60
- 4 自然としてのサッカー 60

第 3 章 情動・表象と出会いの組織化

- 1 2 つめの出会い: ミクロな経験の様式としての情動 64
- 2 ダマシオにおける情動論とスピノザ 65

2.1 情動と表象	65
2.2 ホメオスタシスとコナトウス、理性と情動・感情	66
3 心身並行性と努力: ダマシオ-スピノザから戦術的ピリオダイゼーションへ	69
4 「自然化」された実践理論として	71
4.1 実践的参与の根源と出会いの組織化	71
4.2 変化と実験	73
5 情動の人類学との異同	74
5.1 反-反表象主義	74
5.2 コナトウスとアフェクトウス	76
5.3 戦術的、生理的、自然的	77
6 まとめ	80

第II部 事例と出会う

第4章 FC フォシュというクラブ

1 FC フォシュへの道	82
2 フォシュ、およびポルトガルサッカー	83
2.1 フォシュという地域及びクラブ	83
2.2 ポルトガルサッカーにおける位置	89
2.2.1 ポルトガルサッカーのリーグ構成	89
2.2.2 FC フォシュの位置	90
3 コーチングスタッフ、調査法、調査者の位置	93
3.1 コーチングスタッフたち	93
3.2 調査法	95
3.3 調査者の位置	98
4 U-17 A の選手たち	99

第5章 能力と時間の有限性: モルフオシクロにおける戦術的強度と疲労

1 はじめに: 再-「翻訳」	104
2 メニュー配分の基本形式とメニュー総覧	105
2.1 メニュー配分	105
2.2 メニューのタイポロジー	105
2.2.1 アップ	105
2.2.2 テーマ指向メニュー	107
2.2.2.1 ポゼッション	107
2.2.2.2 ミニゲーム	121

2.2.2.3 シチュエーション	123
2.2.3 ゲーム形式	135
2.2.4 アクセサリー	137
2.2.5 補足	139
3 FC フォシュ U-17 A のモルフォシクロ	139
3.1 火曜日	140
3.2 木曜日	143
3.3 金曜日	146
4 実践的参与の強度	149
5 戦術的強度と疲労、そして能力と時間の有限性	152
5.1 疲労と能力	152
5.2 疲労と時間: 穏やかな変化	154
5.3 有限な能力、有限な時間	160
第 6 章 恐怖を除く、有限を結ぶ: ある出会いの組織化	
1 ある課題	163
2 「恐怖」とプレー	165
2.1 「恐怖」という問題	165
2.2 コナトウスと「恐怖」	176
3 改善の実験	183
3.1 モルフォシクロ	183
3.2 実践的参与と戦術の包括性	185
3.3 組織化の実験	186
3.2.1 ピヴォの変更: 人の位置の変更	187
3.2.2 中盤の変更: 人材の新規登用	189
3.2.3 配置の変更: 三つの方策の融合	195
3.2.4 DF の変更: 三重化する方策、再び	198
4 解決された問題: 有限なものを繋ぐ	216
4.1 セクションの連結	217
4.2 時間的連結	217
4.3 有限な能力の連結	218
4.3.1 能力的連結	218
4.3.2 「なしうるかぎりのこと」の連結	220
4.3.3 一つの個体を作る	221
第 7 章 負の感染: ある出会いの組織化の困難	

1 出会いの組織化の裏面 223

2 疲労なき集中力の低下 223

3モチベーションと自律性 231

3.1モチベーションとしての未来 233

3.2自律性、ピッチの内外、有限な管理 234

3.2.1「全てはピッチの中にある」 235

3.2.2自律性の領域への無関心、有限な管理 235

4 再来した問題 237

第8章 未来を、いまここで生きる：習得の時間について

1 はじめに 250

2 プレースタイルの未来性とモルフォシクロの現在 251

2.1 プレースタイルの未来性 251

2.2 未来の予告：モルフォシクロにおける有限性と現在性 252

3 習得の時間と時間の連続性 258

3.1 再演される過去 258

3.2 過去ではなく、未来とともに 260

4 現在の強度 261

結章 263

文献一覧

あとがき

本論は、サッカーチームを一つの〈小さな社会〉として捉え、そのトレーニングを動的な社会的組織化の過程と見なし、それらを表現する諸概念を創出しつつ、〈小さな社会〉とその構成過程を描くことを試みる。具体的には、戦術的ピリオダイゼーション(以下、PT)と呼ばれるサッカーのトレーニング方法論の理論と、そのポルトガル共和国ポルト市のサッカークラブでの応用実践を素材とし、PTの理論と応用実践に胚胎する思考を、集団が組織化され続けていく過程をめぐ一つのマイクロ人類学として変容させようと試みた。

第1部第1章では、PTの理論的な概要を整理し、マイクロ人類学としてこれを構成するための方法論的視座として、ブラジルの人類学者ヴィヴェイロス・デ・カストロのいう「翻訳」という操作に着目した。そこから、PTの理論を他の人類学と出会わせることで人類学のものへと「翻訳」し、またそうして変容したPTを、その応用実践という事例と出会わせることで、別様に変容させるという道筋を提示した。

第1部第2と3章では「翻訳」の作業を、PTが文献的に示している諸概念について、PTと他の人類学を出会わせながら、実際的に展開した。

第2章では、戦術と複雑なシステムという概念を中心に、行為の集団性と、それが埋め込まれている環境という観点から、PTと人類学的実践理論を出会わせた。PTの戦術概念は、選手たちのプレーを包括的に捉えたときの様相を指示し、複雑なシステムとは、多種多様な因子が働きつつプレーが展開される環境を表現する概念である。PTは、常にプレーを戦術的様相において包括的に捉え、常に選手たちを複雑なシステム内に晒すことで、特定のプレースタイルを実践的に学習させようとする。具体的に〈小さな社会〉の具体的な理念であるプレースタイルは、自己差異化する状況たる複雑なシステムと同じく、自己差異化していく。実践理論と出会うとき、PTは、行為者が実践的に当該実践に参加して学習が進行する点で共通しているが、人の配置の構造と学習されている実践の変異可能性を積極的に肯定しており、行為と環境の変化可能性を最大限考慮しており、いわば自然化された実践理論であると言える。

第3章は、行為者たちの連結の様式および環境の経験の様式としての情動を「翻訳」した。まず、情動をめぐPTの理路が必ずしも明確ではないため、PTが依拠する神経科学者ダマシオの議論と、ダマシオの依拠する哲学者スピノザへと辿って解きほぐし、PTを、PTに内在するダマシオとスピノザに出会わせた。さらにそれを情動の人類学の実存的な次元と出会わせ、PTにおける情動の社会的性格を析出した。PTは選手たちの行為を、情動(行動)、表象(行動のイメージ)の両面を包括的に捉え、そして戦術概念の包括性は、スピノザ哲学の心身並行性に相当することが明らかになった。PTにおける社会的組織化とは、複雑なシステムのただ中で、選手たちがスピノザ哲学の概念でいうコナトゥスを作用させながら、悲しみを与える出会いを避け、喜びを与える出会いを希求すること、情動・表象の水準において他者と結びつくこと—哲学者ジル・ドゥルーズの語を借りてこれを出会いの組織化と呼んだ—と「翻訳」された。また、ダマシオによれば情動・表象は常に変化する可能性に開かれており、PTも、トレーニングが常に直線的に進むとは限らない—実践の学習の進路は、ときに過去に取り組んでいたものに再度取り組むなど複雑なかたちを描く—と述べる(これをPTは、「複雑な

進歩の原理」と概念化している)。

このようにPTの描くトレーニングと試合の過程とは、複雑なシステムに晒されつつ刻々と変化していく行為者たちの情動と表象を、具体的なプレースタイルを基準として、連結させるプロセスであると「翻訳」できる。トレーニングは、環境、行為、プレースタイル、情動と感情、能力といった点について、変化の可能性を全面的に肯定した上で展開される出会いの組織化の過程として、概念化される。

第II部(第4-8章)は、第I部での他の人類学との出会いにより変容したPTを、ポルトガルのサッカークラブFCフォッシュU-17Aチームの2013-2014シーズンのトレーニングと試合の過程での応用実践を事例とし、再「翻訳」を試みた。

第4章は、FCフォッシュに入った経緯を整理し、当クラブのポルトガルサッカーにおける位置、調査方法、調査者の位置、第5章以降にて中心的に言及するコーチングスタッフや選手たちの基礎情報を整理した。

第5章は、当チームで1シーズンのあいだに行われたさまざまなメニューをタイプ別に分類しながら、1週間の具体的なトレーニングの構成を例示し、PTのトレーニングにおいて極めて重視されていた疲労概念を、およびそれに関わる諸概念とともに、「翻訳」した。PTにおいて環境つまりメニューは不測の事態が起きるよう設計され(これは第2章で論じられた、複雑なシステムの問題から理解される)、環境に強度上の差異、すなわちPTの概念でいう戦術的強度の差異が設けられ、1週間の中でその強度が調整されている(このトレーニング上の戦術的強度の調節の原理は、「水平的変移の原理」と呼ばれる)。その環境の強度を調節する上で基準となるのが、選手たちが当該トレーニングを行う日までに経験し蓄積されている心身の疲労の程度、あるいは選手たちがその時点で有する集中力の程度であるとPTは述べる。第3章で言及したスピノザ哲学からすると、疲労の程度ないし集中力の低下の程度は、行為者の能力の逡減、あるいは戦術的強度の許容量の逡減—スピノザ哲学でいうアフェクトゥス概念に相当する—であると「翻訳」される。よって、1週間のトレーニングを設計し実践する上で根本にある条件が、心身の疲労の程度としての、選手たちの能力の有限性とトレーニング上の時間の有限性であるということが、明らかになった。

第6章は、2013年9月から11月に現れた、「恐怖」という戦術的組織化上の課題に焦点を充て、それがトレーニングにていかに取り組まれ解決が試みられたか、またそこから、〈小さな社会〉の実質とはいかなるものであるかについて考察した。「恐怖」は、選手が他者とパスを繋げられないことを指示しており、他方でそれは他者との協働的なありかたの実現可能性が低いままに抑制されているというかたちで、戦術的組織化上の問題とされていた。いかなる方策によってその解決が図られたかを、当該時期のトレーニングと試合内容から検討した。その結果、出会いの組織化という「翻訳」された概念は、選手たちの配置におけるセクションの連結、PTが分類する4つの時間(攻撃、守備、攻撃から守備への切り替え、守備から攻撃への切り替え)に関わる連結、また選手たちの有限な能力(「なしうるかぎりのこと」)の連結、そして相互に異なる諸個体が一つの高次の個体へと合成していくこと—これが構成された〈小さな社会〉である—として再「翻訳」された。

第7章は、とりわけ2013年12月と3月の出来事を中心的な対象とし、選手たちの情動と表象、またそれに連関した出会いの組織化の不安定性—先述の「複雑な進歩の原理」概念に含意されていたような、以前に解決したはずの課題が再び現れ、それに取り組まざるを得ない事態—を論じた。この時期、出会いの組織化の営みは、前章で見たような諸連結をほどかれ、脱組織化する危険に晒された。各メニューは、第5章で論じたように、一定の戦術的強度に自らを晒すことを選手に要求する。しかし、選手たちは、メニューの環境内で、期待されている戦術的強度よりも低いプレーを低い集中力によって展開した。この集中力の低下、戦術的強度の低下に相関して現れる背景として、FCフォッシュの選手たちの事情—プレーすること、特にプロになろうとするモチベーションが欠如している場合が多く、私生活での自律性が欠如している可能性があったと言える。つまり、未来へのモチベーションへの低さが、トレーニングの現在の強度の低下をもたらしたと言える。この考察によって、PTが潜在的に備えていた次元、トレーニングでのプレースタイルの習得、過去、現在、未来という時間的次元が垣間見えた。

第8章は、この時間的次元について検討し、PTを一つの時間論として「翻訳」した。トレーニングは、取り組むべき諸テーマに優先順位を付けて（これは「階層化」と呼ばれる）、そのテーマがトレーニング中に頻繁に現れ選手たちが自らの心身をもって直接経験できるように監督が仕向け（これは「傾向性の原理」と呼ばれる）、しかし戦術的強度を調節しながら環境が複雑化しすぎないようにして（これは「矮小化せず分割する」と呼ばれる）、作られる。この3つの概念を総じてPTは「操作化」と呼んでいるが、トレーニングは、この「操作化」によって、直後の試合で期待され要求されると予想されるプレースタイルを選手たちが学習することを可能にする実践であると言える。この点で、トレーニングの現在は、直近の試合という未来を予告している。しかし、身体技法の学習をめぐる人類学の議論と対比すると、「複雑な進歩の原理」概念が含意するように、トレーニングの現在は、他者とさまざまな観点から連結する未来（第6章）も、連結がなされない脱組織化する過去（第7章）も、同時に潜在的に含み込んでいる。喜びある小さな社会を実現するか（第6章）、脱組織化されたままの過去を再来させてしまうか（第7章）は、トレーニングの現在にて要求される戦術的強度を最大限生き抜き、「なしうるかぎりのこと」をなしきること存している、と論じた。

以上、「翻訳」により析出された、PTの描く〈小さな社会〉の組織化の過程としてのサッカーと試合とトレーニングをめぐるマイクロ人類学は、以下のように終章にて、まとめられた。

〈小さな社会〉の構成過程において、選手たちは常に能力が有限な状態にあり（「疲労＝アフエクトゥス」）、実践と学習のための時間も限られている。それは、この能力の範囲内で、各メニュー、各曜日、各週、複雑な程度を調整し（「複雑なシステム」、「水平的変移の原理」、実践的参与の強度＝「戦術的強度」）、テーマを絞り込み（「階層化」）、プレースタイルが変異する可能性に開かれた動的な過程である（「戦術」「複雑なシステム」）。そのなかで特定のテーマに実践的に取り組み、当該プレーを実践的に経験できるように努力される（「コナトゥス」、「傾向性の原理」）。そうしてプレースタイルが試合において実現されること（「心身並行」の「情動・表象」の両面における「出会いの組織化」

「空間・時間・能力上の連結」)、すなわち<小さな社会>の達成が目指される。しかし、トレーニングの現在は、試合という未来において要求され期待されているプレーを含み込む一方、組織化できていない過去も同時に潜在的に含み込んでいる(「複雑な進歩の原理」)。そうしたなか、プレースタイルという他者と時間・空間・能力面で連結する<小さな社会>を実現するための条件は、その現在の強度の上限を生き抜き、現在時に最大限の集中力を傾けること(「なしうるかぎりのこと」)にある。

また終章ではさらに、本論を、より大きな文脈—ポルトガル社会、欧州サッカー界における経済の問題、学習過程における倫理の問題—に接続するための視座を整理した。さらに、本論の試みが、ヴィヴェイロス・デ・カストロが近年萌芽的に主張している、ネイティヴの人々から思考を摂取し、新たな概念を生産する営為として定義される、「概念の人類学」の実験であると位置付けられつつ、概念の存在論とも呼び得るような人類学の思考を洗練させる一つのステップになりうると指摘した。